II 植 生 概 観

岩手県岩手郡滝沢村を中心とする岩手山山麓部一帯は古くから伐採，放牧，採草，耕作などの人為的影響下にあり，自然植生は局地的に残されているにすぎない。その大部分は人為的影響とつりあって生育している代償植生である。岩手山山麓に広がる森林は岩手山中腹の海抜700～1000m

Phot. 5　冬季雪に埋もれる調査地。
Das Untersuchungsgebiet ist im Winter bis 1 m tief mit Schnee bedeckt.

Phot. 6　あらゆる広葉樹が葉を落とし，ササ類は雪の下に埋れている冬の季観。
Winteraspekt des Untersuchungsgebietes. Alle sommergrünen Laubbäume sind kahl, die Zwerg-Bambus-Arten (*Sasa megalophylla*) sind von Schnee bedeckt.

付近に残されているブナが高木層を優占する林分やミズナラが優占する林分，さらに水際の湿性地に広がるハンノキ林などに代表される自然の夏緑広葉樹林と，長い間薪炭林として利用されてきたコナラ，ミズナラ，カエデ類が混生する二次林がみられる。林業的には谷部や斜面下部にスギ植林，乾性地にアカマツ，カラマツ植林が行なわれている。一部にアカマツのみを残し，他の広葉樹を伐採して生育させた“アカマツ天然林”と呼ばれる林分が小岩井有料道路周辺にみられる。ゆるやかな起伏をなす丘陵地は耕作畑や牧草地として利用されている。